

緑のセンターだより



No.170

公益財団法人 旭川市公園緑地協会 旭川市緑のセンター（相談所）
 〒078-8327 旭川市神楽岡公園内 Tel : 0166-65-5553 Fax : 0166-65-5626
 旭川市公園緑地協会ホームページ <http://www.asahikawa-park.or.jp>

発行：平成30年2月1日



講習会のご案内

（お申込み・受付は前月の20日から）

「果樹のせん定と栽培」-リンゴ、サクランボ、プラム-

とき 平成30年2月18日（日）
 午後 1:00～3:00 定員 50名

講師 ふじくらすも果樹園
 代表 増茂 聡さん



SPECIAL

～東京より特別出張講座～

- 「植物の病害虫と園芸薬品」
- ガーテンドクター草間祐輔さんの
- とても人気のある講習会です。
- 日時：平成30年2月22日（木）
- 午前10時～12時 定員50名



「フラワーアレンジメント」

とき 平成30年3月4日（日）教材費2,000円
 午後 1:00～3:00 定員 20名

講師 マミフラワーデザインスクール 澤沼 雅子さん



NEW ARRIVAL

「ハーブでリップスティック・ハンドクリームを作ろう」
 今回は特別、先着10名様限定¥700で～す！
 とき：平成30年2月28日（水）10～12時
 講師：ハーブコーディネーター 建部 久美子さん

手が荒れてどうしよう？
 お悩み解消!!

展示会のご案内

（初日は午後から、最終日4時まで）

「神楽岡公園の四季写真展」

2月3日（土）～3月25日（日）

【休館日のご案内】

4月～10月は第2・第4月曜日が休館日です。（祝日の場合は翌日）
 11月～3月は毎週月曜日が休館日です。（ " " ）



Come & Join Us !!

* 歩くスキー無料貸出中

◎ 3月初旬（予定）

♥ お待ちしています～



OK

3km

〈園芸の基礎知識〉 植物の種子の構造と働き

～ 5 種子の発芽(2)～

■ 種子の休眠とその打破

植物には生活環のなかで一時的に成長を停止する時期をもつ種類があり、これを休眠といいます。休眠は植物が生育に適さない環境を生き延びるための手段です。極端な乾燥や低温といった環境条件により誘導される場合を「他発休眠」といい、また、環境条件の影響を受けず植物自体の内生的なリズムによる休眠を「自発休眠」と呼びます。グラジオラスやフリージアなどの球根の休眠は後者に相当します。これらの植物は球根の形成と連動して休眠します。自然条件下で夏に開花し秋に収穫されたグラジオラスの新球茎は、その後、発育に好的な条件下におかれても発芽せず、すでに休眠しています。また、自然条件下で春に開花するフリージアの新球茎は、母球が開花する前から徐々に休眠に入り、開花時には深い休眠状態にあり、そして初夏に収穫された球茎はその状態が続いています。休眠した植物は、その多くが特定の環境条件を与えられて初めて休眠が破られます。その際、休眠を打破するために必要な環境要因は一般に温度で、温度条件は植物の種類や品種によって異なります。グラジオラスやダリア、チューリップ、スイセンなどは一定期間の低温に遭遇することで休眠が打破されます。自然条件下では冬季の低温に遭遇することで次第に休眠が破れ、成長を開始します。また、テッポウユリやフリージアは夏の高温によって休眠が打破されます。

■ 種子の寿命

種子の出来方で見ると、受精卵が発生を始め一定の発達段階、双子葉植物であれば子葉、胚軸、幼根が、単子葉植物であれば幼葉とそれを包む幼葉鞘、幼根が形成された段階に達すると胚は発生を中止し休眠に入ります。胚乳あるいは子葉の中の植物ホルモンが胚発生の停止とその後に続く乾燥に対する耐性を胚に与えられ、種子胚が休眠状態になります。この状態は、短期間であればかなりの高温や極低温に曝されても胚は死なない保護された状態といえます。種子の寿命とは、この保護されている期間、胚が乾燥に耐えて生存しうる期間です。種子の熟度や乾燥程度、貯蔵条件(特に湿度、温度、酸素など)によって大きく変化しますが、室温乾燥状態では植物種の違いによって種子の寿命の短いもの(数ヶ月～1年程度)、中程度のもの(2～3年程度)、かなり長いもの(数年あるいはそれ以上)と違いがあります。

(参考資料:農山漁村文化協会「最新農業技術事典」、日本植物生理学会 HP「みんなのひろば・植物 Q&A」ほか)

緑の相談 QアンドA (44)

アイビーを室内で棚に這わせて育てていますが、つるが相当長くなりましたので切って挿し木したいと思いますが、水挿しでも良いのでしょうか？



ヘデラ・ヘリックス水挿し

アイビーの学名は「ヘデラ」で和名を「キツタ」と呼ぶ「つる性低木」です。

多く利用されている種類は「セイヨウキツタ(ヘデラ・ヘリックス)」で、葉に白や黄色の斑の入った美しい品種が多くあります。気根(付着根)を出して壁や棚などに張りついて成長しますし、日陰でもよく育ちますので、棚に這わせるのもよい方法です。長くなり過ぎたり、斑が消えて緑葉が出てきた蔓は全体のバランスを見て適時切戻しを行ってください。切戻しなどで出た蔓を2～3節(10 cm程度)に切り、下葉を取って挿し穂をつくり、赤玉土小粒などに挿し木するか、お尋ねのようにコップなどの容器に水を入れて水挿しも可能です。発根までに10日から1か月程度かかりますので5月頃に定植してください。

(参考資料:NHK 出版 HP「みんなの趣味の園芸」、日本文芸社「さし木つぎ木とり木」ほか)

※ホームページ (<http://www.asahikawa-park.or.jp>) に「花と緑の相談コーナー(Q&A)」を掲載しています。こちらでもご利用ください。

植物の病害

その41 「トマトの青枯病」 あおかれびょう



急激に萎れて枯死



導管の褐変症状



白濁液が噴出

1 寄生しやすい植物

トマト、ナス、ピーマン、トウガラシ、ジャガイモ等

2 被害

急に株全体が青い葉のまま萎れます。数日後には枯死し、次々と発病株がふえてきます。低温時の栽培では、萎れてから枯死するまで時間がかかる場合があります。収穫、剪定作業等(発病株をハサミ等で処理しそのハサミで病原菌を健全株へ伝搬)により地上部から感染した場合、作業した畝にそって連続して発病します。発病株の茎を切断すると導管部が侵され褐変しています。発病し導管が褐変した茎を水に浸すと、白濁液(病原菌)が茎の切断部から噴出します。

3 生態

土壌伝染性の病害です。病原菌は罹病根、非宿主の根圏および土壌中で生存しています。土壌中での生存期間は1～数年ですが、乾燥土壌(土壌水分20%)では10日間以上生きのこることはできません。また、病原菌は地表下から1m程度まで検出されますが、病原菌の菌密度が高いのは地表から40cmぐらまでです。トマトが植えられると、病原菌は根のまわりで増殖し、主に根の傷口から侵入します。根の傷口から侵入した病原菌は、茎の導管中で増殖し、トマトを萎縮させます。発病株の根からは、病原菌が排出されます。病原菌は水とともに移動し健全株の根に到達、発病の機会を増やします。健全株と発病株の根が接触して伝染し、収穫や剪定など管理作業でも発病株から健全株に伝染します。

発病しやすい条件は、酸性土壌より中性土壌で発病しやすく、土壌水分が過剰になると発病が多くなります。根が傷むと発病が助長されます。地温が20℃を超えると発病ははじめ、25～37℃で発病は激しくなります。

4 防除方法

- ・土壌伝染性の病害ですので、育苗には無病土壌を用います。
- ・前作に発病を認めた圃場では、太陽熱による土壌消毒や土壌くん蒸剤等による消毒を行います。
- ・排水対策を行い、連作を避けます。接木苗を使用し、地温を上げすぎない栽培管理を行います。発病株は見つけしだい圃場外に持ち出して処分します。

アザレアの花を毎年楽しむために

ツツジ科 ツツジ属 常緑広葉小低木



アザレアは本来、花つきがよく花期も長いのが特徴です。しかし、「せっかく買っても毎年ダメにしてしまうから…」という声も聞きます。管理のポイントをつかんで毎年、丹精込めた美しい花を愛でたいものです。

1 購入から花が終わるまで…

開花株は暖房のない室内の窓辺で管理すると花を長く楽しむ事ができます。暖房の近くや暖かすぎる部屋では長持ちしないので、できれば日当たりのよい窓辺(レースのカーテン越しに光が当たる所)が良く、日中の温

度が15~20℃、朝は7~8℃くらいの場所が適しています(最低限界温度は3℃程度)。

○ アザレアの根は乾燥や過湿に弱く繊細です。水やりは鉢の表面が乾きだしたら鉢底から流れ出るだけ与え、受け皿には水を溜めないようにします。また、室内では湿度を保つことも大切なので、なるべく花にかからないように霧吹きするなどして工夫したほうが良いでしょう。開花中に肥料は与えません。

○ 花が終わった花からは随時、種子を着けさせないように子房ごと摘み取ります。

2 翌年、また開花させるためには…

① 来年の花芽は夏の高温期に(枝先に)形成されるので、ドーム状に樹形を整える剪定は花後すぐ、遅くても6月までに終わらせるようにします。剪定が終わった株は、鹿沼土7+腐葉土3の混合土で一回り大きな鉢に植え替えます。また、この時期に切り取った新芽は長さ10cmくらいに切り戻して、水揚げした後に鹿沼土に挿して管理していれば、秋には十分発根しているので鉢上げして増やす事ができます。

② 霜の心配がなくなった5月~10月は、戸外のひなた(7月下旬~お盆までは半日陰)に置いて管理します。水やりは鉢土の表面が乾きだしたらたっぷり与え、肥料は5~9月までの生長期に液肥を月に2~3回程度与えます。また越冬は、戸外では凍害を受けて枯れてしまうので、屋内で管理するようにします。

展示室の植物 (77)

ヘンリーツタ

学名: *Parthenocissus henryana*

ブドウ科 ツタ属

ヘンリーツタは中国が原産地で、とても丈夫な落葉つる性の植物です。耐寒性が強く、日陰でも育ちます。成長を放任すると10mほどもつるを伸ばすことから、鉢植えのほか花壇、グランドカバーにも利用されます。

緑のセンターでは、葉が美しいので吊り鉢にして展示していますが、春に赤色の葉を展開すると、やがて赤紫色から深い緑色へと変わり、さらに秋に紅葉します。葉は5枚の小葉からなる掌状複葉で、葉脈に沿って白い模様が入ります。花は黄色で春に咲き、秋に黒い果実をつけて楽しませてくれます。

